

学術論文

コミュニティダンス・ファシリテーターの 特性と養成の現状

— JCDN主催「コミュニティダンス・ファシリテーター 養成スクール」参加者の属性による考察 —

稲田 奈緒美

桜美林大学芸術文化学群

Community Dance Facilitators
Characteristics and the Current State of Training
-Consideration of the Attributes of the Participants in the "Community Dance
Facilitator Training School" organized by JCDN

INATA Naomi

College of Performing and Visual Arts, J. F. Oberlin University

キーワード：コミュニティダンス、ファシリテーター養成、ファシリテーション

1 はじめに—研究の背景と目的

コミュニティダンスとは、既存の舞台芸術としてのダンスとは異なり、年齢・性別・職業・障がいの有無、ダンス経験の有無などに関わらず”誰でも”、劇場やダンススタジオなどに限らず”どこでも”、ジャンルにはこだわらず”どんなダンスでも”踊ることができることを基本とする、参加型ダンスである。1970年代の英国で起こり、コミュニティダンス財団（The Foundation for Community dance. 以下FCD）がその普及と発展を推進してきた。現在では財団名を「People Dancing -the foundation for community dance」に変え、その役割を「コミュニティと参加型ダンスのための英国の発展的な組織、会員組織」とウェブ上で記しているように、「コミュニティ」にはこだわらず多様な人々が踊るという実態が重視され、多様な活動を包含しながら発展を続けている。

日本ではコミュニティダンスが未だ一般的な理解を得てはいないが、2000年代以降、英国と同様にコミュニティダンスに類する参加型のダンスワークショップが徐々に広が

り、増加している。筆者は、2005年以降コミュニティダンスについて調査、研究、実践、教育を行っており、その実践者であるコミュニティダンス・ファシリテーターの日本での養成にも関わってきた。

本研究では、日英のコミュニティダンス・ファシリテーターの特性と養成に関する現状を分析することを通して、日本におけるコミュニティダンス・ファシリテーターの特性について考察することを目的とする。そのために、まずコミュニティダンスのファシリテーターに関する概念を遡って整理する。次に、2014年からNPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク（以下、JCDN）が主催する「コミュニティダンス・ファシリテーター養成スクール」の参加者の属性を分析することで、先にあげた日本におけるコミュニティダンスのファシリテーターの特性を検証し、その可能性と課題を考察する。

2 日英におけるコミュニティダンスの実践者と育成

(1) コミュニティダンス実践者の名称

コミュニティダンスの本場である英国で、その実践者はどのような職名で呼ばれ、また自ら称したのか、歴史を遡って整理する。

1970年代に英国で起こったコミュニティダンスを教えていたのは、「多くはダンサーや振付家であり、彼らはプロとして活動するためのトレーニングを受けてはいても、コミュニティで様々な人に教えるための教育は受けておらず、サポートもなかった。そのような背景から、1981年、ラバン・センターに『コミュニティダンス・アンド・ムーブメント・コース』が開設された」（稲田、2019）。つまり英国では当初、ダンサーや振付家がコミュニティダンスを教えていたが、彼らがプロフェッショナルになるために受けてきた指導法とは異なるスキルが必要であるとの認識が生まれ、それを修得するためのアカデミックな場が、1980年代にはダンスの高等教育機関に開設されたのである。

この実践者は「Animateurs=推進者」と呼ばれるようになり、1986年にはFCDの前身である「National Association of Dance and Mime Animateurs」が設立された。1995年に前述のFCDと改称した際には、約400名の会員を擁していた。2008年に来日した、当時のFCDクリエイティブ・ダイレクターのケン・バートレットは、コミュニティダンスの定義の一つとして、「led by highly skilled professional; dance practitioners（高度な技能を有するプロフェッショナルなダンスの実践家によって導かれる）」（Bartlett, 2008）ことをあげ、「dance practitioners」という職名を用いた。この定義は、現在もFCDで用いられており、「Professional Code of Conduct（プロフェッショナル行動規範）」のウェブページに「行動規範を支えるのに役立つ一連の定義」として、以下のように詳しく説明されている。

コミュニティダンスは、高度なスキルを持つプロのダンス実践者によって主導されます。

コミュニティダンスで働く一部のダンス専門家は、自分たちをコミュニティダンスアーティストまたは実践家（プラクティショナー）と呼ぶことを選択します。他の人は「アニメーター」、ダンスリーダー、または単にダンスアーティストであり、「コミュニティ」という言葉には言及していません。コミュニティの設定でフルタイムで働く人もいます。他の人は、コミュニティダンスでの仕事を、ダンスの講義やパフォーマンスなどの他の状況でのプロのダンス活動と組み合わせています。

上記から、コミュニティダンスの実践者は自らを様々な職名で呼んでおり、統一された職名は使用されていないことがわかる。ダンスの専門家ではあるが、フルタイムでコミュニティダンスを中心に働く人もいれば、その他のダンス活動と組み合わせている人もいます。それぞれの志向性、ダンスワークショップをリードする方法、自己認識によって職名は異なっている。ファシリテーターという職名はこの説明には現れないため、使用頻度は低いと考えてよいだろう。一方で「コミュニティダンスアーティスト」という呼称からは、コミュニティダンスをアートとして強調し、それを担う職種をアーティストと見做す自負と自信を伺うことができる。

2009年時点で、FCDは約1800の個人と団体の会員を擁し、約4600名のプロフェッショナルなダンスの実践家がかかわっていることを確認したが（稲田、2019）、現時点のホームページでは、全世界から4500人以上がFCDのメンバーシップに加入していることが記されている。

(2) コミュニティダンス実践者の育成

前述のラバン・センター「コミュニティダンス・アンド・ムーヴメント・コース」は、現在トリニティ・ラバン「MA and MFA Dance Leadership and Community Practice」とコース名を変えて継続され、MAフルタイム（1年）、MAパートタイム（2年）、MFAフルタイム（2年）の3つのプログラムが開講されている。

筆者が2005年に現地で担当者にインタビューをした際、これらのコースへ大学卒業に続いて進学するものは少数で、ダンスまたは教育・福祉・医療などの職業経験を経たうえで、キャリアアップのために入学する学生が多いことを聞いている。よって、1年間のフルタイムMAの他に、仕事を続けながら学ぶ学生のために2年間のパートタイムMAプログラムを設けているとのことであった。現在は、2年間のフルタイムでMFA（Master of Fine Arts）も開講されており、より専門的で深い学びを経て修士号を取得することができるようになっている。

コース紹介では、「このユニークな職業訓練プログラムは、コミュニティや参加型の

環境でダンスプラクティショナーとして働きたいと考えている人のためのものです。実践的な知識とスキル、そして社会的意義があり、創造的で、応用力があり、包括的な実践であるダンスへの理解により、ダンスリーダーやファシリテーターとしての成長をサポートします。」と記されている。コミュニティや参加型ダンスにおけるリーダー、ファシリテーターの育成のために、実践的なスキルと意義を理解するためのプログラムである。コースに応募する際は、「関連する分野で適切な第一学位（または同等の資格）または5年間の専門的な経験を持っていること」が求められている。ダンスのみに限定されない学位または専門的な経験が、高等教育機関におけるこの職業育成の前提となっていることがわかる。

他方、CDFでは会員向けに多様な育成プログラムを提供している。会員の対象は、フリーランスのダンスアーティスト、ダンス教師、ダンスリーダー、団体と多様であり、それぞれの目的や経験に応じて、育成、発展、スキルアップ、ネットワーク、情報、サービスを提供している。

以上から、英国では「コミュニティダンス・ファシリテーター」という職名はほとんど使用されていないが、ダンスをリードし、ファシリテートするための学位、知識とスキルを発展させ続けるための機関やサービスが存在していることがわかる。コミュニティダンスまたは参加型ダンスの実践者は、従来のダンス教育を受けてきたダンス教師、ダンス・インストラクター、ダンスアーティスト（ダンサー、振付家）と接続しながら、あるいはダンス以外の専門職種と接続しながら、専業または兼業で実践されてきたと考えられる。

このように英国ではコミュニティダンスや参加型ダンスをリード、ファシリテートする人材が養成され、成長を続ける教育機関が存在することで、質と量が確保され、コミュニティダンスが発展したといえよう。

(3) 日本におけるコミュニティダンス・ファシリテーターの登場

英国では根付いてはいない「コミュニティダンス・ファシリテーター」という職名が、片や日本では用いられるようになったのはなぜだろうか。

英語の「ファシリテート (facilitate)」とは、『ジーニアス英和大辞典』によれば「1〈物・事が〉…容易にする、…促進する。2〈物・事が〉〈人〉の手助けをする、…を手伝う」であり、「ファシリテーター (facilitator)」は「容易にする [促進する] 物；(助言などをして) 会をうまく進行させる人、進行役」である。いずれも日本語としては馴染みがなく、日本語の概念に翻訳することは難しい。従って、コミュニティダンスにおけるファシリテーター、ファシリテーションの意味、役割を明瞭に説明することも容易ではない。

日本でワークショップと、それを担うファシリテーターに関する議論が増えてきたのは、1990年代のまちづくりと人権学習の分野である。前者では主に多様な住民が集う場で「中立的な立場から会議の進行役を務める人」であると認識され、後者では「『講師』や『リーダー』といった垂直的な関係性を思わせる進行役ではなく、『一方的に押し付けるのではなく、学習者の中からいろいろなものを引き出し、それがお互いに交流され新しいものが生まれるように全体をみて学習をもり上げていく役割』」と紹介されていた(牧野、2021, 85-86)。その後、教育やビジネスの場などでワークショップの導入が進み、2000年代になると、ワークショップとファシリテーターに関する共通認識が広がっていった。「2000年代中頃以降、ビジネス領域を中心として『ファシリテーション』ないしは『ファシリテーター』を扱う書籍の数が次々と積み重なっていく」(牧野、2021, 88)。

そのようなビジネス書の一つ『ファシリテーション入門』では、「集団による問題解決、アイデア創造、合意形成、教育・学習、変革、自己表現・成長など、あらゆる知識創造活動を支援し促進していく働きがファシリテーションです」(堀、2004, 21)と簡潔に定義され、ファシリテーターを「日本語では『協働促進者』または『共創支援者』と呼びます」(堀、2004, 22)と紹介している。

但し、ビジネス領域において「ファシリテーター」という新たな職業が生まれたわけではなく、「ファシリテーション」のスキルが注目され、新たなビジネス指南書として関連本の出版が相次いだと考えられる。ビジネスで求められるのは、従来のヒエラルキー型組織におけるリーダーシップ、マネジメント能力に代わり、現在の経済・社会状況に適応するためのスキルである。「コンテンツはメンバーに任せ、プロセスのみにイニシアティブを発揮」する「支援(ファシリテーター)型リーダーシップ」と、「人を管理するのではなく、人と人の関係性をかじ取りしていく方法」としての「場のマネジメント」(堀、2004, 24-27)と解説されている。

一方、教育分野でも2000年代以降、学校の教師によって管理、指導される「授業」とは異なる「ワークショップ」が行われるようになり、それを運営する「ファシリテーター」、「ファシリテーション」という手法が注目されるようになった。その背景には、従来の学校教育とはことなる参加体験型授業やアクティブラーニングへの注目、導入がある。

このように、従来の会社経営、学校教育などとは異なる、新たな役割と場への注目と普及に伴い、ダンス分野においてコミュニティダンスを担う役割を、「コミュニティダンス・ファシリテーター」と呼び、従来のダンス教師やダンス・インストラクターとの差別化を図ったのではないかと考えられる。

(4) コミュニティダンス・ファシリテーターの育成

日本におけるコミュニティダンス、参加型ダンスワークショップを担う実践者の養成

は、高等教育機関における舞踊（体育）教員養成や既存のダンス教室とは異なる場で始まった。

日本のダンス界では、ダンスアーティストがレポーターや技術を教えるワークショップとは異なる新しい分野として、障がいのある方を対象とするワークショップが1989年に株式会社ミューズ・カンパニーによって主催され（稲田、2020、4）、ファシリテーション・スキルを学ぶための単発ワークショップが催されるようになった。インクルーシブなダンス（アート全般を含む）、コミュニティにおけるアートを、いち早く英国から紹介し、講師を招聘してワークショップを主催し、日本での人材養成に着手した株式会社ミューズ・カンパニーの貢献は特筆すべきものがある。

一方で、コミュニティダンスという名詞を用いて、「コミュニティダンスが注目される契機となったのは、2008年にJCDN（ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワーク）とブリティッシュカウンシルが全国7か所で催した、『Dance Life Festival 2008 ダンスが世界を救う!?—日本におけるコミュニティダンスの確立に向けて—』のシンポジウム、ワークショップである」（稲田、2020、1）。2014年からは、JCDNが「コミュニティダンス・ファシリテーター養成スクール」を主催しており、コミュニティダンスのファシリテーターという役割、職種が認識されるきっかけを作ったと言える。

JCDNは、養成スクール生の応募のため、以下のようにコミュニティダンス・ファシリテーターを説明している。

コミュニティダンス・ファシリテーターとは

ワークショップ等の活動において、参加者一人一人の表現力や創造力を引き出し、全体を目的に向かって進行する役割。子どもから大人まで、場合によっては、これまでダンスからは遠い存在だった方々を対象に、包括的な視点をもって取り組む力が求められます。また、参加者のダンステクニックやスタイルを上達させる事ではなく、ダンスの持つ根源的な魅力や楽しさを参加者と共有することを目的として、クリエイティブな活動を行う事が重要です。（JCDN、2022）

上記から、従来のダンス教室、ダンスレッスンにおけるダンス教師、ダンス・インストラクター等との違いを、以下のように抽出することができる。

1. 活動の場＝ワークショップ等
2. 役割＝参加者一人一人の表現力や創造力を引き出し、全体を目的に向かって進行する
3. 対象＝老若男女、これまでダンスとは遠い存在だった方々
4. 取り組みに必要な力＝包括的（インクルーシブ）な視点、クリエイティブな活動を行えること
5. 目的＝参加者のダンステクニックやスタイルの上達ではなく、ダンスの持つ根源的

な魅力や楽しさを参加者と共有する

これらにコミュニティダンスの特質を加えて、従来のダンス教師、ダンス・インストラクターによるダンスレッスン、ダンス教室を対照させて、以下の(表1)にまとめた。

(表1)

	コミュニティダンス・ファシリテーター	ダンス教師、ダンス・インストラクター
機会	不定期、非継続的に開催されるワークショップ等。	定期的、継続的に開催されるダンス教室、ダンスクラス
場	ダンススタジオ、劇場、学校、文化施設、高齢者施設、福祉施設、病院、公園など、どこでも開催可能。「どこでも」	特定のジャンルに適した床や構造のダンススタジオ
対象(参加者)	年齢、性別、職業などの属性、障がいや病気等の有無、ダンス経験の有無に関わらない。「誰でも」	自主的、継続的に教室やレッスンに参加する人、ダンス経験の有る人
ダンスジャンル	ジャンルは多様で、明示されない場合も多い。「どんなダンスでも」	教室、クラスごとに、特定のジャンル
目的	ダンスの持つ根源的な魅力や楽しさを体験させる	個々のジャンルに応じたダンステクニックやスタイルを上達させる
役割	参加者一人一人の表現力や創造力を引き出し、全体を目的に向かって進行する	参加者の目的に応じたジャンル、レベルによる技術やスタイルの指導、伝授
求められる資質、スキル	包括的な視点で取り組む。参加者と経験を共有する。クリエイティブな活動を行う	個々のジャンルに応じた技術、経験の蓄積を前提とする、的確な指導力

以上から、コミュニティダンス・ファシリテーターと従来のダンス教師やダンス・インストラクターとの差異は明らかであり、日本のダンス教育には存在しなかった概念と役割であると言える。しかしながら、「コミュニティダンス」という新しいダンスも、「ファシリテーター」という新たな役割、仕事の名称と概念も、すぐには普及するものではない。そのため、従来のダンス教育者・指導者から差別化することはできたが、一般的な認知を得るには程遠い状態であるとみなしてよいだろう。

3 コミュニティダンス・ファシリテーター養成スクールの参加者の属性、傾向の分析

(1) JCDN主催によるコミュニティダンス・ファシリテーター養成スクール

2014年にJCDNが主催するコミュニティダンス・ファシリテーター養成スクールが初めて開催され、以降、新型コロナウイルス感染拡大による中断などもあったが、2021年まで6回継続されている。スクールの内容は、FCDが毎年開催しているサマー・スクールを

モデルとし、英国でコミュニティダンスアーティストとして、またその人材養成に長年取り組んできた2名の講師を招聘して、基礎コースと応用コースに分かれて実施された。基礎コース、応用コースを修了すると修了証書が授与され、2017年度からはプロコースも開設された。

日本ならではの特色としては、コミュニティダンスや参加型ダンスのファシリテーターとして既に活躍している、日本人アーティストがアドバイザーとして参加し、講師と参加者をサポートしていることである。筆者も第1回より、研究者アドバイザーとして企画段階から関わり、毎回スクールに参加している。よって本研究では、JCDNから提供を受けたスクール参加者の情報と同時に、筆者の知見を活かして分析することとした。

これまでの開催概要は以下のとおりである。

第1回

日時：2014年9月20日（土）～23日（火）

会場：大阪体育大学 キャンパス内

講師：セシリア・マクファーレン (Cecilia Macfarlane) ダイアナ・アマンズ (Diane Amans) 受講料：50,000円 (JCDN会員40,000円) / 宿泊費込

注：・大学施設を利用した合宿制。

- ・日本人アドバイザーは、新井英夫、北村成美、隅地茉歩、マニシア、稲田奈緒美
- ・第1回目のため、応用コース参加者は基礎コース受講を前提としていない。

第2回

日時：2015年11月20日（金）～23日（月祝）

会場：大阪体育大学 キャンパス内

講師：セシリア・マクファーレン (Cecilia Macfarlane) ダイアナ・アマンズ (Diane Amans) 受講料：50,000円 (JCDN会員40,000円) / 宿泊費込

注：・大学施設を利用した合宿制。

- ・日本人アドバイザーは、アオキ裕キ、新井英夫、北村成美、隅地茉歩、マニシア、稲田奈緒美

第3回

日時：2016年10月7日（金）～10日（月祝）

会場：福岡県立社会教育総合センター（福岡県糟屋郡篠栗町大字金出3350-2）

講師：セシリア・マクファーレン (Cecilia Macfarlane) ダイアナ・アマンズ (Diane Amans) 受講料：50,000円 (JCDN会員40,000円) / 宿泊費込

注：・会場施設を利用した合宿制。

- ・日本人アドバイザーは、アオキ裕キ、新井英夫、北村成美、マニシア、稲田奈緒美

第4回

日時：2017年11月23日（木祝）～26日（日）

会場：大阪府立少年自然の家（〒597-0102 大阪府貝塚市木積秋山長尾3350）

講師：セシリア・マクファーレン（Cecilia Macfarlane）ダイアナ・アマンズ（Diane Amans）受講料：50,000円（JCDN会員40,000円）／宿泊費込

注：・会場施設を利用した合宿制。

- ・日本人アドバイザーは、アオキ裕キ、新井英夫、北村成美、隅地茉歩、マニシア、稲田奈緒美
- ・スクールを修了して活動している人のスキルアップのためプロコースを新設

第5回

日時：2018年11月22日（木）～25日（日）

会場：森下スタジオ（〒135-0004 東京都江東区森下3-5-6）

講師：セシリア・マクファーレン（Cecilia Macfarlane）ダイアナ・アマンズ（Diane Amans）受講料：50,000円（JCDN会員40,000円）／宿泊費込

注：・合宿は行わず、通いで参加。

- ・日本人アドバイザーは、アオキ裕キ、新井英夫、北村成美、隅地茉歩、マニシア、稲田奈緒美
- ・スクール受講生のほか一般に向けた講座、トークセッションの公開も実施

コミュニティダンス・ファシリテーター養成スクールin東京 関連企画 ネットワーキングイベント2019「ボーダーを超える」

日時：2019年4月27日（土）・28日（日）

会場：新宿NPO協働推進センター（新宿区高田馬場4-36-12）

注：スクール修了生らがネットワークを築き、情報を共有すること、コミュニティダンスとは異なる分野の知見を得ること、日本人アドバイザーらによる多様なワークショップを経験することなど多様なプログラムを組み、一般にも公開した。

2019年度は事業を休み、2020年に城崎国際アートセンターでの開催を予定していたが、コロナ禍により中止となった。

第6回（日本版として実施）

日程：2021年10月29日（金）～11月1日（月）

会場：城崎国際アートセンター

講師：アオキ裕キ、新井英夫、北村茂美、隅地茉歩、マニシア、稲田奈緒美

受講料：50,000円（JCDN会員40,000円）／宿泊費込

注：・開催施設を利用した合宿制。コロナ禍を配慮して参加者の定員を絞った。

- ・これまでアドバイザーとして関わってきた日本人アーティストが講師となり、独自のプログラムを考案し、打ち合わせを重ねて実施した。
- ・ゲストスピーカーとして、セシリア・マクファーレンとダイアナ・アマングがオンラインで参加。その他、公開勉強会として、障がい者福祉施設でのコミュニティダンスの取り組みを紹介し、関係者がオンラインで参加した。
- ・実践コース、リサーチ・ラボの2コースも用意していたが諸事情により中止した。

以上のように、合計6回の養成スクールと、スクール修了後のネットワーク構築とスキルアップを目指すネットワークイベント1回を開催している。次節から、養成スクール参加者の属性を集計し、その特性を分析する。

(2) コミュニティダンス・ファシリテーター養成スクール参加者の属性と推移

①年代別参加者数 (表2)

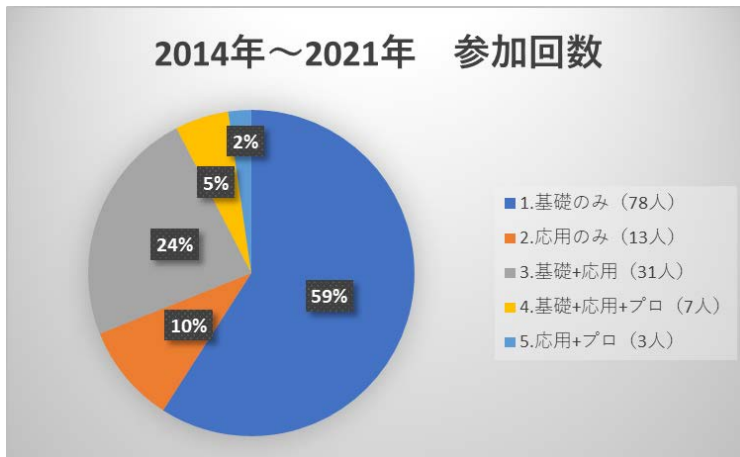
	2014年 (基礎)	2015年 (基礎)	2016年 (基礎)	2017年 (基礎)	2018年 (基礎)	2021年 (基礎)	合計
20-29歳	9	3	10	5	9	4	40
30-39歳	7	13	3	7	8	2	40
40-49歳	2	4	3	3	4	2	18
50-59歳	3	2	1	4	3	2	15
60-69歳	2		1				3
	23	22	17	20	24	10	116
	2014年 (応用)	2015年 (応用)	2016年 (応用)	2017年 (応用)	2018年 (応用)	2021年 (応用)	合計
20-29歳		1	1	2	4	1	9
30-39歳	7	3	4	2	2	2	20
40-49歳	5	1	1	3	2	2	14
50-59歳	2	3	2		1		8
60-69歳	1	2			1		4
	15	10	8	7	10	5	55
	2017年 (プロ)	2018年 (プロ)					合計
20-29歳							0
30-39歳	2	1					3
40-49歳	1	2					3
50-59歳	2	1					3
60-69歳	1	1					2
	6	5	0	0	0	0	11

基礎コース受講者は、20代、30代が多いものの、60代まで幅広い。若い世代が興味を抱いて、まずは基礎コースに参加しているものと考えられる。年ごとに分析すると、東京で開催され、通いで参加可能だった2018年の第5回に若い世代の割合が多い。一方、応用コース、プロコースまで受講しているのは30代、40代が多い。職業として見定め、スキルと経験を積み重ねるといった目的が明らかになり、国内各地で開催される合宿に時間と費用をかけてまで参加しようという意思のあるものが増えるためと推測できる。

合計すると、基礎コース116名、応用コース55名、プロコース11名で、のべ参加者数は

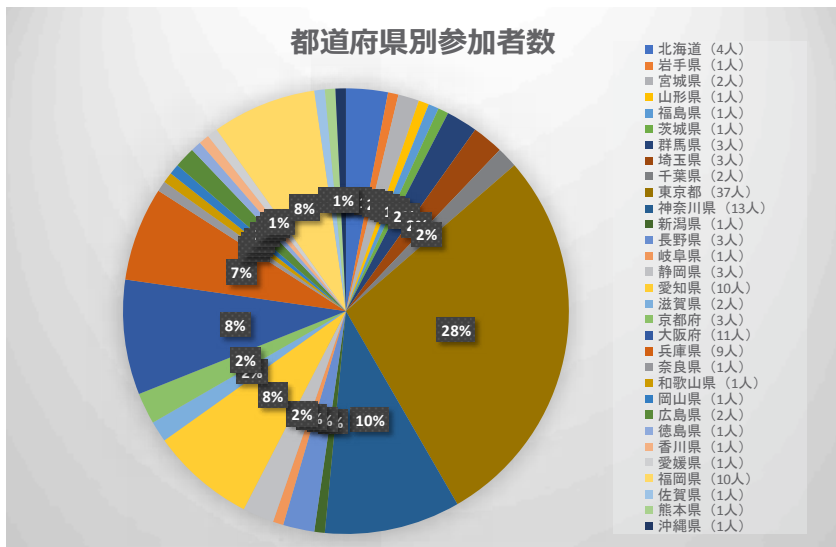
182名、重複を省いたユニーク数は、132名である。複数コースへの参加を分類すると、(表3)で示されたように、基礎コースのみが全体の59%、基礎コースと応用コースを修了したものが24%、さらにプロコースも修了したものは5%である。JCDNへのヒアリングと筆者が知りうる情報を総合すると、基礎、応用、プロコースを重複して受講している人には、現在コミュニティダンス・ファシリテーターとして活動を継続している人が多い。他方、基礎コースのみ受講者の活動情報を目にすることはほとんどない。

(表3)



②都道府県別の参加者数 (表4)

(表4)



居住する都道府県別の集計を、表4で表した。東京が28%で突出しているが、多くの都道府県から参加していることがわかる。2008年に《Dance Life Festival 2008 ダンスが世界を救う!?—日本におけるコミュニティダンスの確立に向けて—》のシンポジウム、ワークショップが開催された全国7か所のうち、札幌、福岡、岐阜に隣接する愛知、関西圏からの参加者が比較的多くみられる。

③職業別参加者数とダンス経験のクロス集計

参加者の職業は、参加申込書に本人が自由に書き込めるようになっていたため極めて多様であり、マルチタスキングも多かったため、筆者の情報も加えながら精査して、ダンス専門家とダンス以外の職業に分け、ダンス以外の職業を7分類し、(表5)にまとめた。

(表5)

職業詳細	2014年 (基礎)	2015年 (基礎)	2016年 (基礎)	2017年 (基礎)	2018年 (基礎)	2021年 (基礎)	合計
教員	4	2		3	2	1	12
学生	3	1	1	1	5		11
ボディワーク (ヨガ、ピラティスなど)			1		1		2
団体職員	1	2	2	2	2	1	10
会社員	1	2		3	4	2	12
自営業	2		1		1		4
その他	2	8	7	9	6	5	37
	13	15	12	18	21	9	88
職業詳細	2014年 (応用)	2015年 (応用)	2016年 (応用)	2017年 (応用)	2018年 (応用)	2021年 (応用)	合計
教員	1	1	2			1	5
学生	3				2		5
ボディワーク (ヨガ、ピラティスなど)	1		1			1	3
団体職員	2	1		1	2		6
会社員	1	1			2		4
自営業							0
その他	4	1	3	4	4	2	18
	12	4	6	5	10	4	41
職業詳細	2017年 (プロ)	2018年 (プロ)	合計				
教員							
学生							
ボディワーク (ヨガ、ピラティスなど)	1		1				
団体職員	1		1				
会社員		1	1				
自営業							
その他	1	1	2				
	3	2	5				

ダンス専門家としての職業は「1. ダンサー・振付家」「2. ダンス講師」「3. ダンサー・振付家・ダンス講師」「4. ダンスとダンス以外の兼業」に4分類し、活動と生計の立て方による差異を明瞭にした。その上で、職業分類とダンス経験をクロス集計した。参

加者のダンス経験とそれを活かした職業、コミュニティダンスやワークショップの経験の関連を考察するためである。参加申込書には従来のダンスとコミュニティダンスの経験、ワークショップの実践経験について尋ねる以下の4項目があり、○をつけるようになっているため、重複も多い。これらをダンス経験1, 2, 3, 4とする。

1. 現在、ダンサーまたはダンス講師として活動している
2. これまでにダンストレーニングを受けたことがある
3. これまでにコミュニティダンス作品に出演、またはワークショップに参加したことがある
4. これまでに一般の方を対象としたワークショップを行ったことがある

これらの職業分類とダンス経験について、全6回分の基礎コースと応用コースをまとめたのが(表6)である。応用コースは参加者が限られるため省略した。

(表6)

2014年～2021年 ダンス経験(基礎コース)	ダンス経験1.	ダンス経験2.	ダンス経験3.	ダンス経験4.
1.ダンサー・振付家	10	10	4	7
2.ダンス講師	11	10	6	4
3.ダンサー・振付家・ダンス講師	7	7	3	4
4.ダンスとダンス以外の兼業	16	17	13	12
5.ダンス以外の職業	30	58	40	30

2014年～2021年 ダンス経験(応用コース)	ダンス経験1.	ダンス経験2.	ダンス経験3.	ダンス経験4.
1.ダンサー・振付家	7	7	6	7
2.ダンス講師	3	3	3	3
3.ダンサー・振付家・ダンス講師	7	7	6	6
4.ダンスとダンス以外の兼業	12	12	11	11
5.ダンス以外の職業	15	23	24	21

上記からわかるのは以下の点である。

- ・ダンスの専門家、あるいはダンスのトレーニングを受けたことがあり、現在ダンサー・振付家・ダンス講師として活動している人(職業1, 2, 3)は、基礎コースに多いが、応用コースになると減少する。また、コミュニティダンスやワークショップ経験が少ない。

- ・ダンスとダンス以外の兼業者(職業4)は、基礎と応用の両コースを修了しているものが多い。コミュニティダンスやワークショップの経験があるものが多い。

- ・ダンス以外の職業(職業5)に就いているひとのうち、現在ダンサーとして活動している、と回答していた人が多いが、それはコミュニティダンスのダンサーであると推測できる。これらの人は基礎、応用の両コースを修了する割合が高い。

- ・ダンスのトレーニングは受けたが現在ダンス以外の職業に就いている者が基礎コースでは最も多いが、応用コースでは大幅に減少する。

筆者がスクール開催中、及び修了後に接しているスクール参加者の活動状況と重ねると、コミュニティダンス・ファシリテーター養成スクールの参加者の特性として、以下

の点を挙げることができる。

- ・職業の養成スクールではあるが、参加者の年齢は幅広く、ダンスの専門家だけではなく多様な職業に従事している人が多数参加している。

- ・ダンスの専門家であってもダンスとダンス以外を兼業している者が多い。

上記から導かれるのは、従来のダンサー、振付家、ダンス教師を養成するスクールであれば、参加者の年代は10代、20代にはほぼ限られ、学生・生徒ら職業に就いたことがなく、多くは幼少期からダンスのトレーニングを受けてきたもの限定されるだろうが、それとは異なる参加者の特性が見られることである。従来は、若くて健康的なダンスアーティストの予備軍が参加者の大半を占め、ジャンルによって画一的な基準や価値観に基づく技術やスタイルの習得を目指すものであった。それに対して、このスクール参加者の多様性は、コミュニティダンスや参加型ダンス自体が多様な参加者を対象とし、どこでも踊ることができ、ジャンルにこだわらない、という特性を反映したものであると言えよう。年齢層が高く、ダンスのトレーニングを受けたことがないスクール参加者、ダンス以外の職業に就いているスクール参加者が多いのは、コミュニティダンスの多様性を反映していると考えてよい。それらの人々が養成スクールに参加する契機としては、自身がコミュニティダンスなどへ参加、出演したという経験が見られる。徐々にではあるが、コミュニティダンスが広がり、それを経験した人がダンサーとして楽しむだけでなく、ファシリテーションにも興味を持って養成スクールを受講し、ファシリテーターとなって新たな参加者に会おうという循環が生じていると考えられる。

一方、ダンス専門家（ダンサー、振付家、ダンス教師）として活動している人たちの中にも、自らが受けてきた厳しいダンストレーニング、技術の上達や舞台での表現の向上を目指すダンスのあり方とは異なる、コミュニティダンスという新しい概念に興味を持ってスクールを受講する人もいる。その目的は、ワークショップ運営や指導の際の参考にしたり、新たな仕事の機会にしたいと考えているものは少なくないだろう。しかしながら、3泊4日の養成スクールでコミュニティダンスの考え方や手法を受け入れ、その価値観によるファシリテーションの上達を目指すまでには至らない場合の方が多くと推察される。

4 まとめと今後の課題

日本におけるコミュニティダンス・ファシリテーターの養成は、英国からコミュニティダンスやインクルーシブな参加型ダンスワークショップが紹介され、徐々に普及していく中で始まった。英国では早くから、高等教育機関にコースが開設され、コミュニティダンスの統括団体による多数の会員向けに多様なプログラムが用意されている環境とは異なり、日本で養成スクールやスキルアップのためのワークショップを主催、運営しているのは小規模な民間団体である。各団体は、事業ごとに会場を探し、参加者を集め

て受講料を徴収し、概して公的な助成金を受けることもなく運営している。そのため団体の収益につながらず、スタッフなど運営側はボランティアに近い状況であることは少なくない。コミュニティダンスに対する運営側の熱意と信念により辛うじて継続されていると言ってよい。運営側の環境を改善することが、よりよいファシリテーター養成スクールの企画、実施の継続と向上に繋げるための今後の課題となるだろう。

コミュニティダンス・ファシリテーター養成スクールの基礎、応用の両コースを修了した人の中には、地元に戻って活動を始め、小規模であっても着実な歩みで継続している人がある。コミュニティダンスとワークショップのファシリテーションという、日本語に馴染まない、イメージの沸きにくい語彙と概念ながら、その意味を養成スクールで経験することを通して理解し、意義を感じ取ったゆえであろう。養成スクールの成果がここに現れているものの、データとしては収集されていない。養成スクールの成果に関する定性的なエビデンスを収集し、客観的な評価を行うことも課題として残されている。

人と人が出会い、触れ合い、からだごとことばでコミュニケーションすることをベースとするコミュニティダンスは、近年コロナ禍の影響を大きく受けた。一方で、コロナ禍による様々な制限が、オンラインの可能性を開いたのも事実である。今年度、JCDNが「コミュニティダンスのすゝめ Community Dance Japan on Web」を開設し、情報発信とアーカイブ化を始めた。情報発信、情報交換、ネットワーク構築、資料のアーカイブ化、事業評価、スキルアップのためイベントなど、環境造成と発展のために必要な事柄が、オンラインによって各地を繋いで実施することも可能となったため、今後の活用が期待される。

本研究により、コミュニティダンスという新たなダンスが、従来にない多様な参加者を生み、その中からプロ、アマチュアを問わずファシリテーターとして活動する人が生まれているという循環が生じていることがわかった。コミュニティダンスを取り巻く環境は厳しいが、人とダンスの多様性が新たな可能性をもたらすことを期待したい。

謝辞

NPO法人ジャパン・コンテンポラリーダンス・ネットワークには情報提供、ヒアリング等で多大なご協力をいただきました。また、コミュニティダンス・ファシリテーター養成スクール修了生、スタッフの皆様、特に関東在住の修了生が結成したBig Family Tokyoの皆様との研究会などから有益な情報をいただきました。心より感謝申し上げます。

参考文献

- Bartlett, Ken (2008), Community Dance in UK 「英国のコミュニティダンス」、『Dance Life Festival2018 ダンスが日本を救う！?—日本におけるコミュニティダンスの確立に向けて—』シンポジウム、JCDN,ブリティッシュカウンシル
- 稲田奈緒美 (2019) 「英国におけるコミュニティダンスの発展と現状」『人文研究』10、1-19、桜

美林大学

稲田奈緒美 (2020) 「日本におけるコミュニティダンスの導入と展開」『人文研究』11、1-14桜美林大学

堀 公俊 (2004) 『ファシリテーション入門』日本経済新聞出版社

牧野智和 (2021) 「ワークショップ/ファシリテーションはどのように注目されてきたのか」『ファシリテーションとは何か コミュニケーション幻想を超えて』、ナカニシヤ出版

山田祐平・森玲奈・安斎勇樹 (2013) 『ワークショップデザイン論—創ることで学ぶ』慶應義塾大学出版株式会社

JCDN 「コミュニティダンス・ファシリテーター養成スクール<https://cdfs.hatenablog.com/cdfs>

JCDN 「コミュニティダンスのすゝめ Community Dance Japan on Web」<https://cdj.jcdn.org/home/>

People Dancing-the foundation for community dance, Professional Code of Conduct 「Definitions」
<https://www.communitydance.org.uk/membership-services-and-join/professional-code-of-conduct>

TRINITY LABAN CONSERVATOIRE OF MUSIC & DANCE, MA/MFA DANCE LEADERSHIP AND COMMUNITY PRACTICE, <https://www.trinitylaban.ac.uk/>